

研究

横川先生と佐伯 函

「郷土の研究」に学ぶもの

会員 山 本 保

四回にわたって、一、郷土の自然について解説を試みましたが、こんどは、二、郷土の災害について紹介いたします。

九月は台風のシーズンです。郷土の人々が、いかに災害(水害)に悩まされてきたかをお話してみたい。

お断りー以下横川先生の文章であるが、それは引用文でなくて、むしろテキストであるから、二三字下げて書く引用の形式を止して、学習資料の本文として掲げる。諒とされたい。(編集子)

二、郷土の災害 (横川 末吉)

台風の害を研究しよう。

まず、台風の害を三つの区域に分けて考えよう。第一は内陸地方(番匠川の上流)、第二は番匠川、堅田川の中流と下流地方、第三は海岸地方に分類されます。

第一の地域は主として山くずれ、第二の地域は主として浸水、第三の地域は主として風害と云います。

したがって、同じ台風でも地域によって、その受ける害に違いがあります。例を昭和十八年九月の台風にとり

ましよう。

この台風は、風の弱いわりに雨が多くありました。正確な観測の行なわれなかつたのが残念ですけれども八百級から千級の雨量があつたようです。つまり地上二メートルの厚さに、山も野も雨を降つたわけで、それが一本の川に集まるのだから恐ろしいはずで

(1) 内陸地方 (番匠川の上流)

大雨のため、第一地域では、因尾村と重岡村との境の酒利岳(七五三)のまわりに大きな山くずれが起こりました。

九月十日日(昭和十八年)の朝九時ごろ、ほとんど申し合せてたよりに起こつています。約十か所余りの大山くずれは、むしろ地すべりという方が適當と思われ

ます。因尾村の山部部落だけで約十所(十級)の田を、回復不能の状態に埋めてしまいました。この状態を調査した結果、私は次の結論を得ました。

すなわち、因尾の山地をつくる岩石が非常にくずれやすい状態にあることです。したがって、雨量次第ではいへども、こんな被害がくり返される可能性のあること

です。次に山の北斜面に、新開を始めとして危険な箇所が多いこと。これは、少しむずかしくなりますが、地層が、ちようど幾冊もの書物を立てておいて、南に向かつて一度に倒したように重なり合っています。そのため、上の北側の地層がじゆうぶん水を飲んで柔らかくなれば、下の地層をすべり台にして、谷間に向かつて地すべりを起こすわけ

です。更に、世間でよく言われる森林の濫伐の結果ではない

ことです。

これは誤解のないようにしたいのですが、洪水と森林とは確かに密接な関係はありますし、戦争中の濫伐が洪水と国土の荒廢の原因ですけれども、因尾の地すべりに關する限りは、直接の原因は雨量です。地すべりの起った場所には、二十年來森林を切つた跡がありませんでした。

下流で洪水を治めるには、しながつて別の工夫も必要だと思ひます。

さて、山くずれの後は湖ができました。

私は、昭和十九年の八月、この湖の深さを測り、おまじか五加しがないことを知り、間もなく、これらは埋められる運命にあることを直感しました。

はたして、昭和二十年九月（北靖台風）の洪水で、これはすっかりなくなりました。その一時的な湖の干上がつた出口は、おもしろいことに三段の砂や小石のかけができています。

考えて見ると、最初の山くずれでせき止められた川が、その一部を乗り越えて流れた時にできたものが一番上段のかけで、昭和二十年九月の洪水の作用によって造られたものが第二段目のかけです。最後は、昭和二十一年七月の洪水によってできた三段目のかけです。

これによつて、洪水の後に土砂は、山くずれの場所から川下に運ばれることがよくわかります。

そのため、因尾では砂防工事と二か所で作つて、一時に砂が下流に出ることを防いでいます。

あまりひどくない洪水が十回くらいあれば海に出そうですが、なかなかそううまくはいかないでしょう。

このため、因尾の川床は七割ぐらゐも埋もり、アユも

ウナギも少なくなり、小學校（注、現在本庄西小學校）から井上部落までの約四kmほどは、平生水が川床を流れまゝになりました。つまり砂の中をくぐつて水が流れるのです。十割余りの田が埋まつたばかりに、山部百石の人々が配給も供出に通う道路は、すつかりなくなりました。くずれた斜面の小路は、朝あつて夕にはない有様です。夕立でも降れば、たつた今通つた道も跡がありません。そのために分教場（注、山部分校）も、山一つまわつた下の松葉に移りました。

山部の人々の不幸は、今もなお続いています。片内や櫻峯では、他の所村に合併したいとさえ考へるようになってまいりました。

(2) 釜匠川・堅田川の中流と下流地方

(1) 中流地方

この台風が、第二の地域にどんな害を与えたでしょう。か。おもしろい対照となります。

中野村（現本庄村中野地区）でも、上野村（注、現弥生町上野地区）でも、山くずれはほとんど見られません。しかし、堤防の破壊と田畑の流失がこれに代るわけです。

一々あげることができないほど、所々で堤防が壊れまじしたが、切畑村（注、現弥生町切畑地区）が一番ひどいようでした。本庄村戸で大きくまわつた釜匠川は、先ず切畑村の尾岩におそいかかり、更に上野村の小倉山ではおられた水は、宮棚（注、弥生町平井）の堤防をくずすのです。

その上、明治村（注、現弥生町明治地区）から出る井崎川が、その下流で更に害を加えます。

川をはさんだ上野村と切畑村では、水害の差は全く比較にならぬほどの大きいです。

中谷宇吉郎博士は、最近の研究で、洪水の対策を次のように述べられました。

「堤防の弱いのは無いのよりも悪い。浸水のみの害は、稲の場合、一割の減収であるが、堤防がくずれると、その付近一帯河原になつてしまふ。むしろ少し低い厳重な堤防が望ましい。」

豊作も三年ほど続きましたが、その前の切畑村の被害は、ほんとは気の毒でした。しかし、その間に、おの耕地整理と水路の改良をやつたのは、偉いといわねばなりません。

(四) 下流地方

鶴岡の古市は、約二十戸ほどの部落でしたが、この洪水で意外な被害を受けました。

上岡駅の上の堤防を切つた河水は、鉄道線路を越えて、旧河道の方向と思われる所を、一気に鶴岡部落の方へ流れました。

私の考えでは、古市は、この旧河道に沿う自然堤の上に出た村落です。平素は二、三メートル高い水はけのよい敷地ですが、この洪水によつて、部落の人々は全く生き、た心持がしなかつたようです。

平屋は、てんじようも浸するほどの水量で、やつと命拾ひした人々は、さうやく梅草礼山のふもとの崩れ地に移転を始めました。八割ぐらゐが移つたおと、戦後の経済界の変動でまだ少し残つてゐるようです。移転に際してとつた処置も、なかなかおもしろく、研究の価値があります。

同様のことが、堅田川の下流下堅田村(注、現佐伯市)江頭にも起こりました。ここはその規模が少し小さく、二

三戸鶴山(注、宇山)に移転しましたが、今は、堤防を改良したようです。

佐伯市の中心部も、元来、洪水のためにできた三角州であり、又、自然堤であると思ひます。したがつて、この洪水の害を受けずにはすむはずが、なかつたのです。しかし、都市になると自然の害が、單に自然の害として起こるのではなく、人工のため、ゆがめられた自然の害として起こることです。

中津川や長島川(中川)は、川口がもとの何分の一分になりました。芳島川(向島川)は、ほとんど暗渠化してなりました。そのうえ、養賢寺から長島川へ注ぐ川は、埋つてしまひました。出口のこんなになつたのは、みんな誤つた文明のなしたわざでしよう。

もともと、川は排水のためのものです。しかし、何十年に一度の大洪水の安全装置です。出口に押し寄せた水は、見る見る所をのんだわけでしょう。

そのうえ、海岸に近い所は、海面の上昇を考えねばなりません。最高水位が高潮と一致すると、恐ろしい洪水となります。斯の人々は、このようなとき、いつもよく考へておかねばなりません。

毎年、洪水の害を受ける池船の人々は、さすがにりつぱな訓練を受けてゐるようです。座敷や雨戸の流れぬように注意するし、また、減水しはじめると、すぐ大掃除をやりまふ。この点を、私は特に感心します。

常盤橋以西の、山際(山手)を除いた市街地の浸水区域も、二階は、たいてい浸水を免れました。元気のよい、注意深い人は、着物(ハンズ)やたたみをほとんどぬらしませんでした。

洪水の時は、冷静に、勇敏に処置しましょう。

今、佐伯市では、河川改修の議が論じられています。雨量を決める力のない人間は、降った雨をどうして早く流すかということと、最高水位はどれくらいになるかを判断して、それを支える堤防をどんなに造るかが、問題の要点だと思えます。したがって、河川改修を考えない堤防は、あまり役に立ちません。切畑村の隈内川の例を考えれば、すぐわかります。

因尾村の造林や砂防工事も、それぞれ効果はありましようが、二階から目撃の感があります。

中国の灌漑には、治水事業記念碑に、堤防を築くより川床を掘れと書いてあるそうです。なかなか味のある言葉だと思えます。

およそ、佐伯市ぐらいの都市で、今まで一度も、河川改修が真鍮で考えられなかったことを不思議とせば女リません。鶴岡の土井内や藤原の人たちが示したような熱意をもって、この問題を解決されたいものです。(以上)

(注一) 芳島川は内新川と呼んで、たが、幹線道路を通ずるために、その水路をコンクリートでかき、地下に収めてしまつてある。
尚、本文「御土の研究」は、昭和三十四年四月発行、当時藤川先生は佐伯第一高等学校(今の鶴城高校)の教諭であつた。

番五川は、大分県南部の水成岩地帯を流れる大河です。本流は、三回峠付近に発して、本庄村中心部を流れ、弥生所・佐伯市を経て佐伯湾にそそぐ。その流路は四十㎞余りです。

四十㎞余りといえぬ、その長さは大野川の半分にも満たず、山國川・大分川・玖珠川にも及びません。

しかし、番五川は、実に大きな支流をもつています。たとえば、堅田川・大越川・木立川・久留須川・井崎川

など、堂々とした川がその例です。したがって、水系としてみた場合、指定河川四十六本、総延長二百五十㎞となり、大分川水系に匹敵する大河となるわけです。

番五川は、城山とともに、佐伯市、南海部郡の人々にとって、忘れぬことのできない郷愁の川です。佐伯にいた園木田独歩も、この川面にうつる友成(山)の姿を愛好しています。

流域に人の住みついたのは、ずいぶん古いといわれています。支流宇津々川にのぞむ山腹、聖蔵洞(石灰洞)から出た旧石器時代の人骨からも、それがうかがわれます。

佐伯市長谷に下城遺跡、同若宮に白鷺遺跡、同沙月に弥生式土器がそれぞれ発掘されています。

弥生所小倉には、横穴古墳群、磨崖石塔もあります。安土・桃山時代の初期、榊原礼城主第十四代佐伯惟定が、薩摩の軍使を討つた番五淵、そして因尾の住民たちが、薩摩をなやませた井ノ上の穴開いなど、史実と伝説がいたるところに散在しています。また、文化財や天然記念物にも、ことかぎません。

小田井堰(元禄四年一六九二)、鬼ヶ瀬井堰(室永三年一七〇六)、常盤井堰(文化十四年一八七〇)、高島井堰(安政三年一八五六)なども、旧藩時代、この本流に築造されて、米の増産に重要な役割を果たしました。

佐伯市、南海部郡の歴史と文化は、番五川と切つては切れぬ、深い関係にあるといつても過言ではありませぬ。

他方、流域一帯の雨の多さは、番五川を別名おばれ川と呼ぶ氏のでした。

梅雨期と台風期は、上流では山くずれ、地すべりがあり、中流から下流では、洪水がたびたびおこりました。そして、流域の人々は多くの被害をうけました。統計から県主要河川の洪水は、らん用期をみますと、大野・大分川が三年に一回、八坂・山内川が四年に一回、泉館・玖珠川が六年に一回なのは、喬直・堅田川は二年に一回の比率になっており、そのおそれ、方々如塞の物語つています。

しかし、最近では治水で進み、この統計も過去のものにならうとしています。そして、この治水によつて、佐伯市、南海部郡は発展して、今日に至りました。

(参考資料)

佐伯の風水害

佐伯藩石高 二万石

元禄 一五	年 紀 元 年 一七〇二	七月 大風雨洪水 約七〇〇戸被害 死者一五人 在浦田畑 五、三五一石損毛
正徳 二	一七一二	七月 大洪水 八月 大洪水 田畑一三、六四〇石損毛 潰家六八 破船八 溺死二三人
享保 七	一七二二	七月 大風雨洪水 市中浸水一丈余 検分の役人新道にて三名溺死
享保 一四	一七二九	長島新地の住民を悉く藤原村に移し、其の地を長瀬村と名づく(大洪水のため移動)
寛保 元	一七四一	大洪水 潰家一七六軒 田畑四八五三石余損毛 上岡村・下野村の百姓岡領内へ逃散 大坂本村、川中村、宮下村の百姓一三軒 男女四五人、馬五匹 臼杵領に逃散 翌年送還

延享 元	一七四四	大風雨出水 高九尺 潰家一三七八戸 田畑 高五、九一石損毛、溺死八人
天明 三	一七八三	この年より天明八年迄 大飢饉(つぎ、餓死者多し)
天明 七	一七八七	夏旱魃 五穀実らず 領内大飢饉 今泉元南米一〇石を献じ 窮民を救う
寛政 三	一七九一	凶作尚続き 藩政困難となる 領民に献金せしむ
寛政 一 二	一八〇〇	飢饉 今泉元南再び米五〇石献ず
明治 二 六	一八九三	十月 大水害 市街家屋過半浸水す (國木田歩歩モミの水害に遭遇す)
昭和 一 八	一九四三	九月 喬直川大洪水 市街全域浸水
昭和 二 六	一九五二	十月 ルース台風 学校倒壊等 被害多し 喬直川改修工事 国営移管
昭和 四 二	一九六七	喬直川水系・堅田川水系 木立川水系 一級河川に指定される

(余頁) 明るい高年賞・受賞およるこび

去る六月六日 別府で開催された「老後のしあわせを高めるついでに 佐伯史談会関係の次の三日は表彰されました。

およるこび中します。(別項再記の予定)

安部弥七工門氏(八十五歳)「佐伯史談会」(佐伯史談会)「佐伯史談会」の研究会の代表者、佐伯史談会のレギュラーとして「地域」の良き指導者である。

多田太郎吉氏(七十七歳)「佐伯市吉山雲漢」(福の品種改良、作付栽培の改良研究)、「地域社会を盛衰し 明るい御土づくりに貢献」

五十川金作氏(六十八歳)「弥生所切畑」(愛情をこめて十年間 病人への看護をつづけていく)、「老人介護表彰」

「老人介護表彰」

(以上)